



京都の民主運動史を語る会機関紙 題字 住谷悦治

発行所

燎 原 社

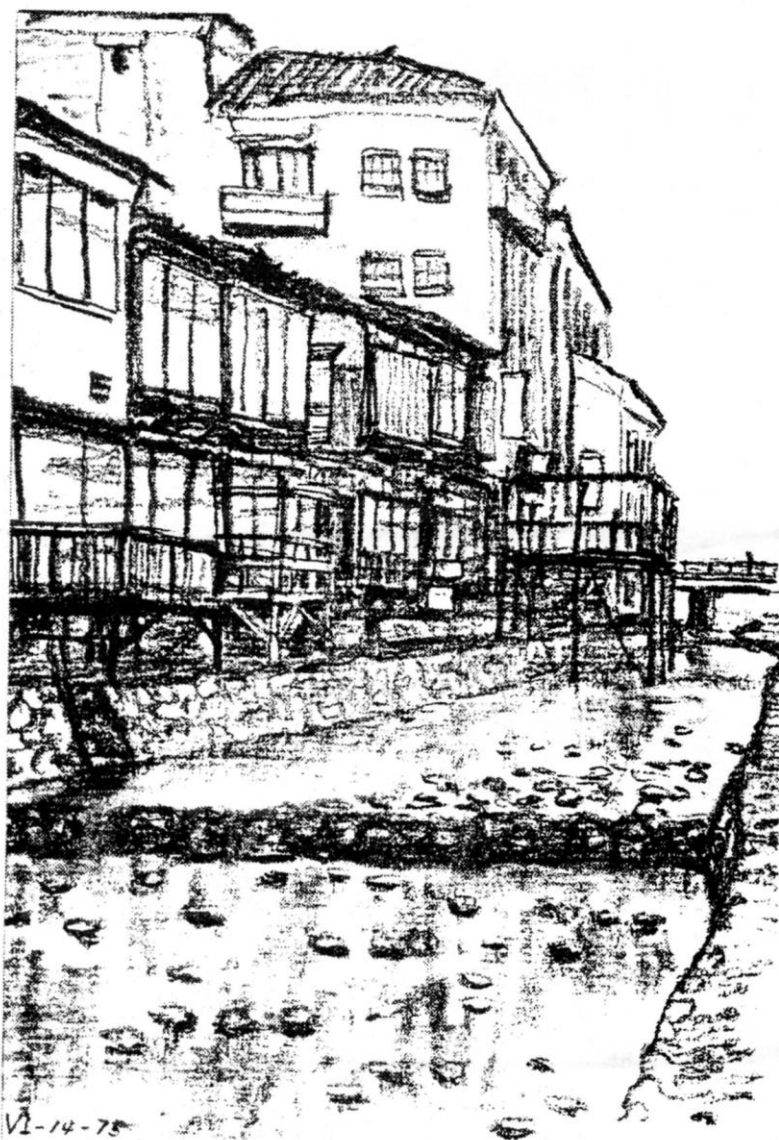
〒603 京都市北区小山上総町

TEL (075)432-4275

発行人

細 野 武 男

会費・誌代とも年3,000円



三條風景・京都

永原

誠

農民運動散歩記(五)

品角一郎 (遺稿)

この「農民運動散歩記」は、故品角一郎氏(一九一〇—一九八一年)が、その最晩年に死に至るまで書きつづけられていたものである。

すぐれた画家であり、民主的な詩人でもあった品角氏は、一九四六年から約十年間農民運動に携わっていたことがある。日本農民組合京都府連合会の泉隆書記長のもとで、書記として京都府連の再建と発展のために活躍されたのである。この記録はその当時の思い出を書きつづられたものである。

品角氏がこの「散歩記」を書かれるようになったのは、一九七八年の夏に、当時私どもがやっていた京都府の農地改革史に関する研究会で、品角氏に敗戦直後の農民運動についての思い出を語って貰ったことがきっかけ

になっている(この研究会の成果は、京都府農地改革史編纂委員会編『京都府農地改革史』一九八〇年刊、にまとめられている)。本文にも書かれているような事情から、日農京都府連に関する資料が焼失してしまっていたために、関係者から当時の農民運動の状況についても聴き取りを行うことになったのである。

この中では、品角氏が農民運動にかかわるようになった事情や、丹後を中心とし府下全域に及ぶ農民運動の状況が、数多くのエピソードを交えながらビビッドに描かれている。

体験的農民運動史として、農地改革期(一九四五—五〇年)の農民運動を知る上で、貴重な資料となりうるであろう。

(立命館大学教授 大藪輝雄)
(九二・九・二〇稿—再録)

中郡五十河村のこと

私は、与謝郡の野間村、天田郡の上豊富村、中六人部村と歩き、つぎに中郡五十河村、口大野、周枳、竹野郡の間人、網野、加悦を歩いた。そのつぎは、南山城の多賀村へ出掛け、それから南桑田郡を歩いたが、このなかで中郡五十河村のことを書くことにする。私が五十河村を訪ねたのは、一九四七年(昭二二)年の頃であったと思う。私は五十河村に細見正二郎君がおることを、丹後地区委員長の長壁民之助氏から聞いて訪ねた。長壁氏は「五十河村に細見君といって非常に誠実な若者がいるから一度行ってくれ」と云われた。五十河村は、峰山駅の手前の口大野駅で下車して、周枳村を通って一つ峠を越すと、そこが五十河村である。その村へ入ったところに明田部落があるが、ここに細見正二郎君(日農京都府連の執行委員)の家があった。

の中心地は峰山町で丹後ちりめんの生産地であり、この村でもハタを織っている農家が多い。この村へはいる途中にある周枳村も河辺村もみなハタを織っている。僕の家でも織っている」と話していた。その晩食事のあと村のことを話して呉れたが、ここでも矢張り強制供出米のことや税金が酷いとのことであった。私は、野間村、上豊富の細胞の活動や闘争の話をした。ところが、細見君はそれを小さなノートにいちいちとっていた。長壁氏から聞いたとおり、実に几帳面な人物であった。私は翌日彼と別れたが、その時、これは僕の家で作っている煙草の葉だといって、幾枚かの煙草の葉を呉れたことを覚えている。何故かその時、昔読んだ島木健作の小説のことを思い出した。

農協づくり、党支部、
日農支部の結成

其後幾度も五十河村を訪ねたが、とくに印象に残っているのは、戦時中の農業会が一九四七年八月に解散し、それかわって農業協同組合法が公布され、どの村でも農業協同組合の設立が準備

されていた。私は細見君からの連絡で、農業協同組合に就ての講演と、同時に日農支部の結成集会で行ったことがある。

この集会は細見君が努力して、村の有力者から、青年まで集まり、集会場は参加者で満員であった。この集会には野間村から洞養寺の渡部桂舟師もわざわざ峠を越えて参加していた。集会は盛会で終わった。そのあと細見君の誘いで渡部桂舟師と私と、それに集会でアイサツをした矢野助三郎氏その他二、三の農民とつれだって、延利部落にある矢野氏の宅にお邪魔して御馳走になったことがある。

矢野氏は五〇才をすぎた年配であったが、なかなかの反骨の気性を持っておられ、第二次吉田内閣をきびしく批判された。そうして、党が強くなることを話され、農民組合を強くせねばならぬと話しておられた。同席の渡部桂舟師は、野間細胞の活動と話された。細見君も、この村に細胞をつくり、農民組合を作ること力説していた。私は強く農民の口から党をつくり、農民組合を強くせねばならぬと直接聞かされて、農民運動の在り方を教えられた思いがしたのである。この晩みは矢野氏の好

意で、ての頃珍しい酒を御馳走になったうえ、矢野氏の奥さんの美しい三味線と唄を聞いたのである。この日は実に印象強い夜であった。

其後細見君、矢野助三郎氏(日農支部の支部長になってもらった)の努力で、党細胞と農民組合は組織された。細見君は日農府連執行委員になった。またさらに、細見正二郎君は村会議員に立候補して当選し、農民の要求で闘い大きな成果を上げ、さらに町村合併で大宮町になってからも町会議員として現在も元気で活躍している。細見君はまた、多忙な町議の任務の中で、丹後地方に埋まっている「民話」を掘りおこし文筆活動をつづけておられ、二、三集出版されている。細見君は以前京都民主主義文学会の機関紙「新しい人」にも原稿を寄稿していたことがある。

去年の夏、大藪輝雄先生達とお会いした際、私が日農府連の書記をやっていたとき発行していた日農の機関誌『働く農民』―現在では貴重な資料―を「細見正二郎君が大切にもらっていたのを送ってもらった」と云って、大藪輝雄先生に見せていただいたときは本当に

驚き、胸が熱くなった。うのである。私は、いま細見正二郎君の健闘を心から祈る次第である。ところが、私がこの五十河村に行かない時には、党の丹後地区委員長の長壁民之助氏がよく指導されていたのである。このことも書き加えておかねばならない。

農協を働く農民の手で作れ

通達 一九四七、一二、三一

日本農民組合京都府連合会書記局
農業協同組合を
働く農民の手で作れ!

農地改革は、封建的土地制度のもとに呻吟していた農民を解放し、耕作権を農民にある程度解放した。今度の農業協同組合は物的基礎を農民に約束する意味で重要である。現在のところ、農民はその農業協同組合に対して関心が薄いが、もしこれを村の顔役とボスに奪われたらそれこそ働く農民は生活苦の中で泣かねばならぬ結果になる。現在の農地委員会、食糧調整委員会にしても働く農民の代表が選出されていないために土地取上げに、供出に、非常に苦しんでいるではないか。民主的な組織を保守的なものに、その権利と支配権、さらに運営権を奪われたら農民は徹底的に苦しまねばなら

ぬ。現在民主党、自由党の反動勢力は農村の反動的な分子を通じて、土地改革を阻害し、日本の農村民主化をロコツに阻害しておる。そうして農産物を低物価で抑えて農民を苦しめている一方農業会の反動的分子をつかって、今度の農業協同組合も農業会の看板塗りがえで終らせようとしている。現に問題になっている農業会従業員は三分の一に及ぶ休職処分も、従組の進歩的な分子を全部休職処分しているのである。われわれは保守勢力のこうした攻撃に対して断乎闘はねばならぬ。このたび農業会解体後組織される農業協同組合は、働く農民が中心になって組織せねばならぬものである。ところが村長、農業会の理事や幹事が現在発起人となって設立準備会をつくってやっているところがあるが、これは、このたびの法令で断乎排撃されねばならぬことになっているのであるから、もしも農業会の役員が推進組織に介入しておったらこれを辞めさせ、働く農民が中心となつてやるべきである。

農業協同組合法はさる十二月十五日施行された。これと同時に農業会の解体総会が各村でもたれる。これに対して農民は積極的に参加して農業会の財産引継に不正やゴマカシがおこらぬように充分努力せねばならぬ。財産処分委員会には組合員は積極的に参加し

て財産目録に記入されてある物が実際にあるか無いかを検討したり、価格が正當につけられてあるかどうかを検討せねばならぬ。

設立準備会を農民の手で直ちににつくれ！

いまだに設立準備会の組織がつくられない村は、ただちに十五名以上の働く農民でつくる必要がある。この際農民解放のためにたたかふ人材を集めることは勿論のこと、青年、婦人団体または農業会の従組の中でも進歩的な人にもどしどし参加をうたえて組織することが大切である。反動的な分子、保守的な分子はこれに参加させてはならぬ。設立準備会が組織されたら、つぎの項目を実行せねばならぬとともに、啓蒙宣伝教育をどしどし行つて農民に協同組合の目的、意義を浸透さすべきである。

(一) 目論書の作成 (二) 定款作成委員会 (三) 総会創立の招集 (四) 設立の認可申請等々を民主的にやるべきである。

農民組合は、農業協同組合推進の母体である。そのために各組合員は先頭にたつたかうべきである。農民のなかにはまだ農民組合の目的や意義を知らぬ農民がある。それだけにこの際農民組合自体が農民の生活を守るためにも農業協同組合の民主的な設立の

ために奮闘せねばならぬのである。

農民組合は、講演会、座談会、研究会を積極的に計画して教育宣伝に努力すべきである。各組合では日時、場所を決定して府連に報告すれば、講師をただちに派遣するから活発にやるべきである。

周枳、河辺、口大野の日農組織

中郡の五十河村に党と農民組合が組織されたことは(昭和二三、五、五 五十河村日農結成)、隣村の周枳村、河辺村にもその影響があり、周枳、河辺さらに口大野にも農民組織と党の組織ができた。口大野の農民組合の代表者は山崎某氏で、日農京都府連の執行委員であったと記憶している。

また、口大野善王寺には、農民組合員の藤森某氏が住んでおられたし、また二・一ストのあと帰農していた海員組合出身の荒田君がおり、党の拠点となっていた。

つぎのことは農村工作隊の時のことであるが、河田賢治府委員長以下十名余りで奥丹後にはいった時、この部落で演説会をやり、その晩藤森氏の家と荒田君の家に分宿した。その翌朝私たち工作隊は河田 治府委員長を先頭に、列入

れがおくれていた藤森氏の田圃(たんぼ)に入り、稲刈りをやったことがある。それは、人手がなく、大変困っていると前夜藤森氏から聞いていたからである。あの時の工作隊は行ったところで、こんな列入れの手伝いをしたことがあった。

この頃は、記憶では、芦田内閣が昭電疑獄事件で大きく揺れ動いていた時で、演説の内容はこれが中心で、それに供出と税金問題であった。丁度その頃教育委員会が設置され、党からは府教育委員選挙に谷口善太郎氏が候補補していたため、谷口善太郎氏の推薦演説もやったことを記憶している。またあの東宝争議の話もしたが、これには農民は大きな関心をもっていた。演説の前に、はげしい東宝争議のスライドを映写したが、戦車、装甲車を先頭に武装警官が砦撮影所を包囲している生々しいスライドを見て、農民は憤激していた。

戦時中この口大野、周枳、河辺の農民から土地を取りあげ飛行場が建設された。終戦後、農民は土地の返還闘争を起しこれを取り返したが、この闘争には、日農府連の泉隆氏が非常な力を注いで指導していたことをおぼ(おぼ)えている。

杉谷、弥栄村の土地闘争

峰山町杉谷には日農府連執行委員であった平井七郎氏がおられ、平井氏を中心に土地闘争があったが、泉隆氏がこれを指導していた。また、農業協同組合設立にもこの平井氏が努力された。当時日農府連に協力していた山田幸次氏と共に、農協設立のことでこの平井氏をよく訪ねたことがある。

峰山の奥にある竹野郡弥栄村にも、その頃土地問題があったが、これには泉隆氏が指導しておられた。

間人と奥田茂雄

私は弥栄の奥にある間人(あいど)にはいった。ここには、奥田茂雄氏(のちに日農京都府連書記長)がおられた。

現在丹後町間人は、半農半漁の町でまた機業もあった。ここでは奥田氏が終戦後、ただちに民主化運動をやっておられたので、私は非常にらくであった。一九四六年のあるとき奥田氏を訪ね、その夜座談会をもったが、ここでは若い人々が集った。話題は、他の村と

少し趣がちがって、日常生活問題よりも、社研的であり、理論的な方面の話が中心であった。また時には文化的な方面のことも話題になった。ところで座談会の途中に、一青年が「これから漁に出ます」といって立ちあがったので驚いた。わけを聞くと「漁師のわれわれはこれから仕事で、夜中に海に出ることがある」と話した。遅しいこの青年はいま町の町会議員をやっている東理代吉君である。東君はなかなかその頃から理論家でもあり、実践家であった。これは今は亡き奥田茂雄氏が指導したものだと思っている。私がはじめて間人にはいった当時は、奥田氏が一人で党活動をやっておったが、私が行くたびに党員が増えていた。また、話題も社研的なことから、実践的な話がよく出るようになり、町民の生活要求をもって、よく町長と交渉した報告を聞くことがあった。

この間人で野間細胞との交流会をひらいたり、ときには、野間の洞養寺で交流会を開催したことがあるが、これにはいつも二十名余りの人々が集って、実に活発な討議がされたものである。

今は亡き奥田茂雄氏は、私と泉

隆（日農の任務からはなれたあと、日農の運動を続けた立派な人であった。党が五〇年問題で不幸な分裂の状態がつづいていたときであった。また、党は半非合法活動にはいつていた頃、ある日、春藤誠一氏が私をたずねてきて、「奥田茂雄氏に農民運動をやってもらおうと思っているがどうだろう」と相談にきたことがある。私は戦後から、奥田茂雄氏のすぐれた人柄と学識の広さを知っていたから、農民運動家としては実に素晴らしい指導者であると確信している。ただ、心配なのは躰のことだと答えた。こんなことがあつてから二、三カ月あとに奥田茂雄氏がこられ、「農民運動をやることにした」と話され、大変な激務だから注意してやっていくようにと話したことがある。このことがあつてからは度々農民運動のことについて相談にこられたし、どここの村はどうだと話しにもこられた。さらに、一九六二年（昭三七）四月農民同志会を共に組織したり、一九六九年（昭四四）三月九日嵯峨二尊院において「泉隆氏の思い出を語る会」を共に開催したりしたことがある（泉隆氏は一九六八年十二月に亡くなられた）。

奥田茂雄氏は病軀をおしてよく活動され、一九五〇年（昭二五）末頃から衰退していた京都の農民運動を復活させ、今日の全日農京都府連をきづきあげてきたすぐれた人物である。また、奥田茂雄氏の大きな努力で、今日、京都の農民の皆である京都農民会館を建設したことは忘れることのできない大きな功績の一つである。

（以下次号）

生涯を労働者として

南区の田中豊藏さんの活動

（中）

語り手 田中豊藏
聞き手 湯浅貞夫

四、無産青年同盟と三・一五事件

田中 三・一五事件は日本共産党への大量弾圧事件でした。私は染芳の書記の池上伴治の指導で、無産青年同盟に加入し池上と親密にしていました。

青年同盟の事務所は東九条大石橋の所にあり、日本農民組合や労働党と一緒にです。農民組合には泉隆や熊谷久吉、そして小野治三吉さんも堀芳次郎さんもいました。河合悦三さんもオルグで来ていました。社会科学研究会のメンバーもよく出入りしていました。長谷川博、大田遼一郎この人々も三・

一五事件でやられました。

私は染芳の常任の池上伴治君から目をかけられ党に入れようとしていたんですよ。自分は仲仕の仕事で京都市内の地図をよく知っておりビラまきでも徹底してやりました。特高もまいてやりましたから参っていましたね。それで三月一五日は池上伴治君は川端署にやられました。私は十五日の夜に、池上に弁当を差入れました。私の名前が弁当屋からわかり私も又検挙されたんです。その時の情況をいいますと、昭和三年三月十五日未明、五時前後でした。京都府警察本部と各署の特高課員がよ

り抜きの新選組と名づけておりました。連中が一斉に多くの黨員や活動家を検挙したんです。

私は黨員ではなかったのですがその時はのがれました。各部署で調べました所十五日の夜です。堀川署が一番多かったのですその時点でつかまっていなかった。

染労組合長の増山君

西陣の辻井民之助・佐々木民三郎

堀川署管内の高沢仁三吉・染労の南善蔵、

七条署管内の佐々木駒蔵・私、田中豊蔵等皆んなで七八人が「歯みがき、手拭、石鹸、ブラシ、紙等を差入れさせてくれ」と堀川署特高課に申し入れました。中々認めませんでした。本部に問い合わせた差入れを認めました。堀川署の特高課の調査部長細見が表に出て来て一同を見渡しました。

青年同盟の田中の姿を見るなり急いで署内に入りました。私は「これはあぶない」と思い「用事が出来た」といって早くわかれて帰りました。

細見は表に出て来て「田中豊蔵がいたが、どこへ行った」といった様です。後日佐々木駒蔵氏が言っていました。私は五、六日たっ

て少しさわぎが静かになったので梅小路駅に働きに行きました。

そしたら梅小路駅前の派出所に堀川署・七条署の特高課員が五人・七条大宮上ル運送店主の家に二人、これが私を検束しました。私は馬車屋で馬を引いているから署員は東九条高瀬川の馬屋について来て「逃げたら承知しないぞ」とどなり、七条署に検束されました。昭和三年三月廿二日の頃です。

私が入ると同時に学生の委員長石館直三君がたらいまわしで他の署へつれていかれました。石館君は貴族院議員の長男と聞いていました。

七条署の取りしらべはそーっら激しかった。特高課員は後日顔を合わせるとまずいので、盗人などを調べるドロ警が調べて拷問をするのです。武道をやる署員は竹刀、柔道の署員は三・四段のが前後左右に投げ飛ばします。私も投げられた。が塩小路加茂川角のポリスで四段の男もいました。「高瀬川の田中じゃないか、おまえは心やすいから今日は許してやる」といっていました。「部落の栗山さんの隣にいる早川に用事でいくので」がしてやる」といったこと

もありました。

本部の取調べは夜の十二時から三時頃まで本部と七条署員がかさず調べました。そして一か月過ぎた四月廿四・五日頃「労働争議の様子を調べた。田中、お前等の小魚が口をつまんで白状しなかったも本部特高課は大魚を飼っているのだ。じたばたしても皆んなわかりきっているのだ。貴様は黨員と目をつけており大魚からも入党しているときいていると……池上からも聞いたのだ……」と申ししていました。そして「いくら運動してもだめだ。今日、政府に楯突いてもだめだ、くだらんことはやめとけ」といいました。

私は「なにくそ」と思って頑張りました。

湯浅 池上伴治という人は青年同盟ですか。

田中 池上は無産青年同盟の活動家で染労の常任です。すこぶる優秀な人物です。岡山県出身で京都の黒門綾小路下るところにいました。私より一つ年下だと思います。

池上は公判廷の検事の前で「日本共産党に入党せよといわれて、私は双手をあげて賛成したんだ」と演説した程の人物」。当時、

京都には小田原、松山、成宮という三羽鳥の検事がいました。池上は公判で日本共産党万歳を称えたのですから実にえらいもんです。プリントが上手でした。この池上が「早川忠孝については気をつけよ、逮捕されても絶対に工場の労働者の名前を言うなよ」といわれておりました。私はそれで絶対口を割らなかったんです。

早川は皆んなしゃべっていたんです。これはあとでも述べますが、私達は警戒しました。

池上伴治については北牧孝三さんとも言っていたのですが「岡山県委員会でも調べてもらおう」と。池上はどうなったか、兵隊で戦死したかも知れません。あの長野県の教員組合のメンバーも弾圧をうけ、松本連隊から中国山西省に行かされ、多くが戦死したといえますからね。

湯浅 池上さんの事跡は調べる必要がありますね。

田中 今やから言いますが無産青年同盟はたくさん活動家がいましました。北山栄がいました。東九条西山町にいて職場はトランプをつくっている任天堂の労働者です。東山本町筋の工場です。これもプリントが上手でした。二四才か二

五才で胸を悪くし東寺の済生会病院で亡くなりました。それから西本健太郎、河上先生の用心棒の馬淵、中野などいたと思います。

社会科学研究会は京大の岩田義道、大田遼一郎、長谷川博、河合悦三、三浦某、同志社にはモスコイに行っていた山崎雄次などがいたと思います。この人々も顕彰すべき人々です。

湯浅 田中さんは当時日本共産党には入らなかったんですか。

田中 入っていません。池上伴治君は私を入党せよと目をかけていたとは思いますが。私はよく島原大門通正面下ルの日本労働組合評議会の事務所にいました。谷口善太郎さんが主事で稲葉辰造さんがおられました。私は日和見主義はきらいでしたから、無産者新聞や労働新聞をよみました。

当時右翼の労働組合の人々もよく本を出していました。金正米吉、村尾藤男、西尾末広などがね。しかし私は左翼の方です。服部孝三、これは今でも伏見に在住しています。また西林治三吉は水平社、金井健吉等と青年同盟で一緒でした。あのきびしい時代に警察をまきながら決死の覚悟でよくビラまきなどしました。

五 普通選挙運動

湯浅 昭和三年二月、一九二八年の普選の時は、どうでしたか。

田中 私は下京ですから京都一区です。水谷長三郎を推しました。御幸町御池下ルの選挙事務所に応援に行きました。労働党です。池上伴治から応援に行けといわれて行きました。泉隆君が水谷の書記をしていました。水谷の代弁などもやっていました。しかしあとでは別れました。思想的にはちがったんですね。

水谷君もいかんのですよ。川端四条下ルの芸奴の置屋に泊り込んで選挙をやっていて、新聞記者に見つかって書かれました。こちら是不利になりました。当選はしましたがね。結局はこの娘さんと一緒にになりましたね。

湯浅 二区の本山宣治の方は。

田中 私達は青年同盟の事務所が十条大石橋の所で日農の人と一緒に、相楽郡の堀芳次郎さんが書記長でよく演説をやられました。上狛の演説会では、向いの会場に奈良電社長政友会の長田桃蔵が会場をかりていました。乙訓の小野治三吉も演説しました。

湯浅 堀芳さんは、りやすい演説の名手でしたね。

田中 そうです。私等もよく爆弾演説をやったものです。

湯浅 爆弾演説とは。

田中 「断末魔の資本主義は今まさに倒壊の前夜にある」というやつです。

湯浅 名セリフですが、資本主義の全般的危機論ですね。

田中 また、貧民や遊女たちが資本主義の尖兵として南方方面に売られていく……まずしい日本の婦女子は故国に帰ろうとしても帰れない、手紙を出そうとしても出せない。領事館にさからうものや国家の不利益になる様なものは一切止められる。だから心ある日本の船員にたくして親元に手紙をこつづけるのです。私は鹿児島県指宿郡山川村の親御さんに娘さんからの手紙をとどけました。門司で投函し神戸で二、三日停泊するからといっておきましたが、親がはるばるたづねて来て「娘が身売りした金で何とか田畑を買って生活を立てておりますが、娘が今かえると家は火の車、帰って来てくれるな……というわけです。親子であっても帰るなということ、四十になっても五十になっても、春

を売らなければならない日本女性が多か……ああ……とやるわけです。それは人情話ですから注意・中止はないんです。

「ましてこのかなしい運命はあすは我が身ではありませんか……」。

とやります。ヤンヤの拍手です。

六、日本無産党事件

湯浅 田中さんが結婚されたのは、

田中 私が二十七才、家内は二十一才でした。奥村甚之助が府会に当選した年でした。その五月二〇日。妻は両親なし、愛知県知多半島半田で十三才から二十一才まで織物工でした。それでも二百円の金をためていました。私が日本無産党で京都市会選挙に立候補した時、二百円を軍資金に出してくれました。五四〇票とれました。「ようけとったなあ」といったものでした。下京区ではこの時菱野貞次が当選し保守の松下平太郎は落選しました。日本無産党として当選したのは東山の坂本時三だけです。

これは昭和十三年九月十三日の選挙です。無産党の全国の役員は加藤勘十、鈴木茂三郎です。宗教家の瀬尾義郎などもいました。京都では南善藏や、木箱屋の山田さん、全水からの党员もいました。湯浅 瀬尾は無神論者同盟でしょう。

田中 そうです。京都にもこれ来ました。

湯浅 当時のスローガンは何でしょう。

田中 議会の清浄化、戦争反対です。戦争反対は一遍にやられました、取り下げよです。それから、戦時中の事で国民は生活苦、特に配給の遅配欠配をなくせなです。

湯浅 津司市太郎のことは。

田中 あの人はいまじめな人で社会大衆党から出た人ではないですか。娘さんが大阪の大学の先生へ嫁入りました。医者と運動で苦労をされました。

湯浅 府会で反軍演説で五日間の登院停止を食いましたね。

田中 中国戦線の皇軍慰問決議に反対したんです。

七、今になって言っておきたいこと

田中 「死者にムチを打つな」という言葉がありますが、運動の歴史の真実を明らかにする意味で言っておきたいことがあります。

早川 忠孝のことです。彼は学校は出ていませんが、東九条西山町の栗山千吉さんの隣にいました。お母さんは子供四人で苦しい生活。女手一つで宿屋の残り物をもらわねばならん生活でした。早川は京都の無産青年同盟の輝ける委員長といってもちあげられていたんです。

しかしどうもおかしい点がありました。集会があってもこない事がよくありました。

早川 君は三・一五事件頃も労働運動に参加していました。各地の会場で演説しました。大阪府堺市耳原病院の近くの寺院で演説しました。他の地方からの弁士は検束です。堺は全水の力が強いから、署に抗議したら検束をまぬがれたそうです。堺から早川が和歌山県にいきますので池上君も後からついて行きました。夜七時から演説会、京大学生の武藤丸楠君も早川も、中止はうけましたが、検束

はまぬがれました。

昭和三年一月頃から急に世間がおちつかない気がしました。早川君は京都の同盟の同志の中から姿を消しました。

島原評議会の稲葉辰造書記や学生の上村君にききましたが、こないと、川端七条下橋の栗山千吉さん宅にもきいたが早川は四五日前から家にもどらず、早川の弟さんにきいてもわからず、ラオし替屋の元さんにきいても一週間程もあつてない。だれ一人早川の行先を知りません。私は稲葉君と上林君の前で早川不信を訴えました。

そこへ三月十五日の一斉検挙です。そして先に話した様に私もつかまりました。そして特高は「お前等の小魚(ジャコ)がだまっていてもわかってる。大魚が鯛ってあるから」でしょう。

湯浅 早川の仕事は

田中 ルンペンプロレタリアです。仕事についていません。そこを警察にねらわれたと思います。私は馬車屋をやっている、なきなきでも食えるからと思って絶対に口を割らなかつたんですが、彼はしゃべったんじゃないですか。社会科学の栗原佑さんは荒神口にいました。京大の経済学部の小林輝

次さんは、東九条の栗山千吉さん元アナーキストですが、そこに下宿して部落の研究をしていられた。これもやられました。早川がしゃべったと思います。早川は三・一五事件も日本無産党の時もやられていないんです。

「水平社の大会に行く」というので十二月も皆でカンパしてオーバーを買ってやったんですがね。

早川はそれから市が払い下げた古物の鉄や地金を西七条にあつめて商売をやる様になりました。そして金もうけをし、東福寺にある伊吹の別荘を買ったんです。弟は黒川染工に出入りして坂根甚左エ門という巡査部長がピツタリついていました。坂根は三〇才位でした。労働争議を徹底的に弾圧した男です。早川の弟の財産づくりに協力した人ではないですか。

戦後、京大人文科学の渡部徹さんが、京都労働運動史をかきました。私達も大分烏丸丸太町下ルの労働運動史事務所によばれてで話しをしたことがあります、そこで坂根甚左エ門も来ているのです。あの本には昔の特高の資料も入っていると思います。

私は「えらいやつが来ているなあ」と思いました。



梅林は戦後市会議員になりました。十条の青木建設と深くつながっています。青木は滋賀県出身で私の隣村です。社長は青木光造です。

私はこの目で見ました。梅林の九条の選挙事務所は青木建設の小島さんが陣中資金をもっていくのを。

「青木が大きくなって梅林さんも結構やなあ……」と皮肉を言う小島は困り顔で「そんなことを言うてくれるな」といっていました。

梅林は私に出会って「先輩、先輩」といいますがね。この間も下鴨の橋の下を見ていたら青木建設が大きな公共土木工事をしていました。党の市会議員さんも頑張っていました。(以下次号)

昨春秋、石川県羽咋市在住の高野源治さんから、編集部あてお手紙をいただきました。泉隆の研究をされている方です。この号の「農民運動散步記」(五)に、泉隆のことも語られていますので、高野氏の了承を得て、掲載させていただくことにしました。(編集部)

冠省、『燎原』83・84号拝受。代金一年分同封いたしますので宜敷く。振替番号がわからないので紙幣を入れましたが、振替口座を設けられたらと思います。安くできるそうです。

湯浅さんには十五年前に、泉隆の調査でお世話になりました。井上甚太郎さん方まで一緒にもらったりしながら、そのままになっています。泉の生家のあたりの小学校に勤務しまして、泉の兄さんの孫どもの授業をもったりしましたし、泉の妹の息子が同じく都教組で活動していたりしましたので、いっしょに京都へ出かけたりしたのです。田村敬男氏にもお世話になりました。

今度品角一郎氏の遺稿がのっていると村中さんに聞いて、お願い

することになりました。品角さんの『岩に憑かれた男』も求めましたが、絵のことしか出ていなくてがっかりです。「礎をきずいた人々」の品角さんの「泉隆」は役に立ちますが「山潜研究」の「泉隆特集」は貴重です。

私は数年前から一回の『七尾の地方史』に「能登農民運動史稿」を書いておりまして、再来年位に「泉隆」を書くつもりでいますので品角氏のそれに期待しています。

泉が一九五〇年を期に殆ど農民運動から離れたのはなぜか。当時農民組合が全国的に壊滅する時期にあたりますし、徳球さんがその年、泉をひどく並居る中で罵倒したのに、泉は一言も言わなかったと聞いていますから、それらと重なって、翌年農民組合をなげ出したのか、京教組などと一しょにいたその本部が、火災にあったというから、資料不足でわからなくなっているようですが。何しろ私は生前の泉とは会っていないのですから、つかみようがありません。井上甚太郎さんは泉の反対派らしくて、殆ど何も聞けませんでした。堀芳次郎さんも同様でした。

『燎原』83・84号の「井上甚太郎に聞く」は、どうも私等が行っ

たときのテープからのようです。これも京都農民運動史としては貴重なものでしょう。

谷口善太郎は加賀の出身です。戦前京都にいた人で能登に表宗雄さんがいます。森英吉のことなどよく知っている人です。

以上気のついたことを書きました。『燎原』——小部数の発行で大変な負担だと思いますが、継続させる事を期待しています。石川県社会運動旧友の会は、金沢の伊藤進さんが実に根気よく続けて下さっていますが、もう年ですので病院へ出たり入ったりで、氏が倒れたらこの仕事も終りになってしまうことでしょう。戦前の運動は一応『石川県社会運動史』に私も参加してまとまりましたし、戦後は森直弘さんが大冊をまとめられています(森さんも今年亡くなりました)。東大での京都滝川事件運動関係以来のすばらしい人物でした。

一九九二・一〇・九 高野源治



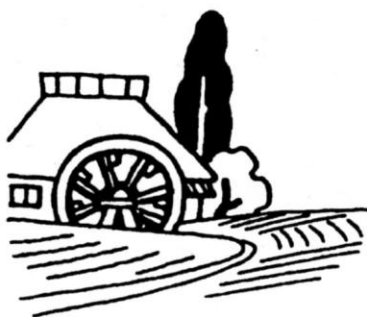
領収書にかえて

87号につづいて、この号では、93・2・15〜3・3に受領させていただいた方々のお名前を掲載させていただきます。厚く御礼を申し上げます。

『燎原』事務局

中西 昇 宮津市
今井 俊一 北区
酒井 一 大和高田市
奥村 和郎 東山区
天野 和夫 右京区
梶田 富一 西京区
清水 裕 左京区
米田貞一郎 北区
藤原ひろ子 北区
伊藤督太郎 下京区
小野喜三郎 上京区
井上 秀雄 伏見区
田中 耐子 左京区
小原喜代子 左京区
西村 悟郎 山科区
浅井 元子 左京区
清水 照子 天田郡
立白 従道 城陽市
定免 政雄 堺市
大宅 博 右京区
武田 大蔵 大阪市平野区
齊藤 哲雄 向日市
中内 広 山科区
五辻英一郎 中京区

西城 保子 宇治市
都築 文義 滋賀県滋賀郡
小松 とし 神戸市灘区
山口 正之 宝塚市
田尻 博一 城陽市
桑原 英武 茨木市
森本 博之 綾部市
河野 通博 高槻市
橋 睦子 南区
白井 照代 左京区
嶋内 勇 北区
木又 謙二 左京区
渡辺 照子 八尾市
小山 真一 北区
小井 実 西京区
塩田庄兵衛 東京都文京区
寺前 蔵 西京区
浅田源三郎 右京区
葛西千恵子 右京区
井ヶ田良治 長岡京市
藤井 和雄 宇治市
森 英生 高槻市
門脇 植二 右京区
田畑茂二郎 左京区
測田 徳二 北区
田中 豊蔵 南区
羽原 正一 大阪市福島区
安田 守男 宇治市
伊藤清太郎 滋賀県甲賀郡
岡本 博之 東京都中野区
儀我壮一郎 川崎市麻生区
秋田清二郎 上京区
鴨脚 光増 大阪市西淀川区
岡崎 芳三 南区
瀬野 弘文 大和郡山市
安田 てい 右京区
田中 ミヨ 明石市



大松 勇 東京都中野区
川井 妙子 西京区
梅田 晶三 北区
津田平太郎 広島市安佐北区
立原 昌保 右京区
林 恒男 左京区
日高 知史 亀岡市
大道 俊 大阪市東淀川区
後藤 靖 左京区
ヨシトミ・ヤスオ 左京区
宮川 和雄 伏見区
大藪 輝雄 左京区
上野 輝将 山科区
田中 策三 長野市
市川 正治 西京区
長谷川つたへ 名古屋市昭和区
平田 敏夫 北区
中村 欽吾 伊丹市
手塚 亮 岡山県苫田郡
奥田 昭治 長岡京市

編集部より

☆前号でご家族よりのお手紙を紹介させていただきました。会員の小柳津恒氏は、残念ながら七月二〇日に逝去されました。享年九〇才でした。謹んで哀悼の意を表します。

☆四八回目の八・六原爆の日を迎えます。

「冷戦後」の言葉に拘わらず、依然として軍事優先の政治状況が世界をおおっています。核兵器廃絶の世界人民の世論の高まりが要請されます。

☆第一二七回特別国会が開かれています。「自民」「非自民」構図がどのように展開するのか、国民は注目しています。自民党政治を真に国民のための政治に転換する道はどこかを深く考えることが求められています。

☆戦前、戦後の民主主義運動の軌跡を証言することが、本誌の任務です。会員の方々の積極的な発言をお願いいたします。

(九三・八・六 おくだ)

× ×

会や本誌については、編集部担当の奥田修三(宇治市広野町寺山17-257、〇七七四・四三・一三四七)、湯浅貞夫(京都府船井郡日吉町保野田、〇七七二・二・〇一四六)の両名のいずれかにご連絡下さい。